日本経済新聞　2004年（平成16年）10月23日（土曜日）

文化

漢字文化

進む情報化社会
中国の経済発展

研究に熱

東アジア連携探る

漢字や漢文が代表する「漢字文化」が新たな研究課題として関心を集めている。京都大学は東アジア共有の文化である漢字を情報化社会の中でとらえ直す大規模な研究プロジェクトに取り組む。二松学舎大学は日本漢文学研究の世界的拠点構築を目的とする研究に着手した。漢字を媒介として中国、韓国、台湾などと共同出版を始める出版社も出てきた。

継承への方策

コンピューターで漢字を扱うには、漢字一つひとつにコード番号を割り振る形で行っていた。しかし異字体は、実際には一つの漢字に対し複数あっても、現在のコンピューターでは一つの文字で表していることが多い。コードに割り振っていない文字もある。紙のほか木や竹、金属など書写材料の違いの情報化も難しく、漢字と書写材料の関係は研究できなかった。

京大が目指すのは、それらをすべてコンピューター上で処理するシステムの研究。その一つが字形や構成要素、発音など漢字に関する知識をデータベース化、コードを不要にしたシステムで、既に一部実用化した。

さらに、京大はナリッジベース（知識ベース）の構築を計画している。単語や熟語、人名、地名などをただ単に検索するのではなく、種々の要素を関連づけて検索することが可能になる。例えば人名を選択すると、その人物の履歴や足跡、記録に残ってさえいれば出会ったすべての人がいもづる式に分かる。制度、文化などの面で東アジアに最も強い影響力を及ぼした唐王朝時代のナリッジベースを手がける。

基礎資料となるのは、紀元前四百年から紀元十世紀末までの歴史を編さんした『資治通鑑』だ。「唐代のすべての知識が引き出せるシステムを目指す」と同大学人文科学研究所の高田時雄教授は語る。コンピューター全盛の時代にあって、漢字文化をそのままに継承し未来へ伝えていくための方策と言える。

日本漢文学研究の拠点を目指す二松学舎大学は人材育成に力点を置く。

手始めに、頼山陽や寛政の三博士の一人、柴野栗山など日本人が作った漢文などを取り入れた大学生向けテキストを作成、今秋から試用を始めた。漢和辞典の引き方や送り仮名、返り点の用法などもわかりやすくした。

同大学は付属高校で三年間「論語」を朗読させるなど漢文教育に力を入れてきたが、日本全体でみれば漢文教育に対する熱意は薄まる方向にあり、中国や韓国の動きとは逆。簡体字の中国では五年ほど前から古典を扱った出版物に繁体字が増えてきた。公文書はハングルしか認めない韓国では漢字ブームが起きているという。

「本場」でも関心

こうした背景から同大学は八月下旬、中国、韓国、台湾の漢文教科書作成にかかわる専門家を招き、漢字の現状と将来をテーマにした国際シンポジウムを開いた。

韓国・成均館大学の林炯澤教授によれば、経済第一主義に対する反省から、漢字文化が持つ道徳的・精神的な価値が評価されるようになった。韓国貿易協会などの加盟会社の中には、入社試験に漢字能力検定を反映させる会社もある。漢字検定は民間主導で始まり、二〇〇一年に国家が公認、今年は受験者が百万人に達する見込みだという。

中国でも漢字や漢文に対する関心が高まっている。「二〇〇〇年のカリキュラム改革で、従来とは比較できないほど古典教育を重視するようになった」と、顧之川・中国教育部課程教材研究所研究員は報告。中学・高校の国語教材の三五％ないし四五％を詩歌が占めているとした。

漢字という共有の文化を持つ東アジアだが、近代化、戦争を経る中でそうした意識は引き裂かれた。シンポでは、成均館大学の林教授が東アジアに共通する教養書の制作を提案、参加者の賛同を集めた。

これには既に先取りした動きがある。「本とコンピュータ」編集室が三月に出版した「東アジアに新しい『本の道』をつくる」だ。日本、中国、韓国、台湾のそれぞれの現在の出版事情をリポート、共通点を見いだす中から新たな道を探った。

再び絆となるか

序文で、津野海太郎総合編集長は「お互いの無知・無関心状態を、政治的、経済的、さらには軍事的な圧力によってではなく乗り越えるには、どうすればいいのか。私たちの共同出版は、その可能性をさぐる一つの実験」と記す。

このほか、「東アジア漢字文化圏の平和・共存・未来のために」を経営理念に掲げる金寿堂出版（奈良県葛城市）のような出版社もある。

書家で京都精華大学教授の石川九楊氏は、東アジアの広がりの中で漢字文化への関心が高まっていることを「文化的必然というよりむしろ、パソコンや新しい通信手段の普及、中国の経済発展がもたらしたもの」と指摘する。

「東アジア共同体」構想をめぐる議論が熱を帯びるなか、漢字が再び東アジアの絆として機能する時代が来るのか、大いに注目されるところだ。

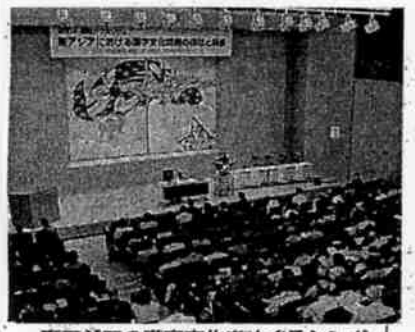
（編集委員　松岡資明）

出版からもアプローチ

漢字文化と密接なかかわりを持つ出版。それは今から千年ほど前、木版という形で東アジアから始まった。東北大学の「東アジア出版文化の研究」は出版と社会、国際関係などとのかかわりを解明することを目指す。

研究は四年前に始まり、様々なことが分かってきた。中国出版文化の中心にあったのは福建で、宋や元などの時代に書かれた古典の多くが明代に再版された。江戸幕府はそれらのほとんどを買い集めていたという。幕府だけでなく大名、裕福な町民も買い求めた。

「美術史から抜け落ちていた部分が、出版文化を研究することから分かってきた」と、東北大東北アジア研究センターの磯部彰教授は語る。中国の絵入り本が日本の浮世絵のルーツになった可能性もあるという。



東アジアの漢字文化をめぐるシンポジウムでは様々な意見が交わされた

国際シンポジウムで明らかになった東アジアの漢字・漢文教育の実態

	漢字教育	漢文教育	近年の傾向
日本	常用漢字は1945字。うち約1000字を小学校で教える	高等学校の漢文授業時間は2003年で週1時間程度	漢文など古典教育は減る傾向
中国	小学校で約2500字を教え、中学校でさらに約1000字を教える	詩歌・散文の教育に重点。小学校で80首、中学校、高校で各50首暗記	文化大革命から転換、伝統と古典を重視する教育に力入れる
韓国	漢字教育は中学校から。小学校では教えていない	国語から独立した教科として位置づけ。教材の50％以上を自国の古典が占める	漢字ブームを反映し、小学校から教えることを検討中
台湾	小学校で教えるのは2200～2700字	孔子、孟子などを教えるが教養として詩歌に親しむ	2001年に教育改革が行われ、国語の授業が大幅に減った